
幽体離脱

千葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幽体離脱

【コード】

N5852Q

【作者名】

千葉

【あらすじ】

深いねむりからさめる

「考えすぎだよ。」

彼女はいつものように笑うと、少し首を左へ傾げた。
色素の淡い髪が彼女の薄い肩をすべる。

彼女の髪を梳く様に撫ぜると、まるで子供のそれのように細く柔らかなそれは
儂い感触だけを残して指の間をすりりと通り抜けていった。

考えすぎだよ。

彼女はいつもそう言う。

でもこれは癖だから、もう直ることはないんだ。

幽
体
離
脱

「来てくれて嬉しいよ。まさか本当に来てくれるとは思わなかったから。」

「どうして？呼んでさえくれればいつだって駆けつけるよ。」

彼女に向かって微笑みかけながらそう言うと、彼女も僕に向かって微笑み返しながらそう答えた。

同じ言葉をいつかの誰かにも吐いたのだろうか。

彼女はゆっくりと視線を左に流していき、腐りかけの木枠の格子が嵌った窓へとやった。

カタカタと硝子窓が鳴り、隙間風が彼女の髪を僅かに靡かせている。

雨は降っていない。しかし風の強い朝だった。

「たまに、今が全て夢なんじゃないかと思うんだ。」

彼女の視線を追い、自分も窓を眺めながらそう呟いた。

それはまるで独り言のような調子で。

彼女は窓から見えるよりももっとずっと遠くの景色を見るように、虚ろな視線をしていた。

その耳に僕の声が届いていないのなら、実際それは独り言だったのかも知れない。

強い風のせいで雲の流れが速かった。

雲の量は少なくないが、時折隙間から陽の光が顔を覗かせていた。

ささやかに注ぐその光を反射しながら漂う小さな埃の粒が、まるで雪のようだと思った。

「過去の自分が見る、未来の自分の夢なんじゃないかって。でも

実際は逆で、今を生きている僕らが過去の夢を見ている。僕らは過去に囚われている。縊り過ぎていると思うんだ。そのせいで、今を見失っている。ただ空っぽな自分だけがここにあるような…夢の中に、中身を置いてきてしまった気がするんだ。まるで、幽体離脱みたいに。」

僕は独り言を続けた。彼女の耳に届いていなくとも構わないと思った。

自分の思考を整理するための行為で、そこに同意も逆説も必要とはしていなかった。

しかしどうやらこれは独り言として完結はしなかったようだ。

彼女は窓の方を向いたまま、ゆっくりと首を項垂れた。

癖の無い真っ直ぐな髪がさらりと流れて、彼女の表情を覆い隠した。

「…君も、同じなのかい？」

独り言として完結しないのであれば、必要になるのは確認だった。器だけの僕らが馴れ合うために必要な作業だった。

(後書き)

Syrup16g / 遊体離脱

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5852q/>

幽体離脱

2011年10月7日23時34分発行